

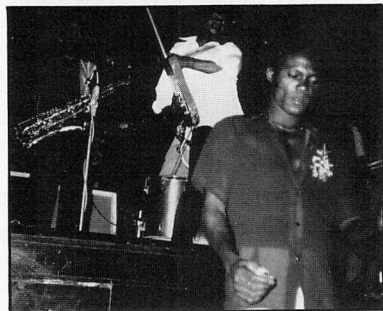
「京都ナイト」という5日間のイベントがあった。別に「歴史都市——」とか国体とかとの関連イベントではないが、とにかく京都にフォーカスを絞ったものであった事は確かである。

このイベントが何故行われなければいけなかったのか。実は、この4月25日にあのキャプテン・レコードから同名のLPレコードが発売されていた。そのプロモーションのひとつとしての必然性はあった。しかし、この盛り上がり欠けた“京都ナイト”の5日間には、思わず、今の京都ミュージック・シーンを見せつけられたような気がした。

何故こうなるのか。いくつもの原因が考えられるが、まず言えるのがアーティスト・パワーの不足だ。ネーム・ヴァリューのない事が客の入りの悪さにつながっている。それでは何故ネーム・ヴァリューがないのか。関西に有力な媒体がないからである。Lマガジン、ぶがじゃに何のパワーもない。地元を徹底的に作り上げようとする方向性が何ひとつないのが現状だ。これは謂る悪循環というやつで、

クリエイティブな文化が現れない原因になっている事はまちがいない。ニュース・ソースのメインがいつも東京ネタでは仕方がない。などとグチをこぼしていても話が始まらないのでそろそろ本題に入ろう。この盛り上がり欠けた5日間の参加アーティストを並べてみると、まずは80年代初頭の京都シーンにおいて唯一カリスマ性を持っていた ZIG・ZAGのヒロシとマークが新たに取り組み出したトリックスター、EP-4のギター、好気タツオが以前から活動しているチーム、そして同バンドのパーカッショニスト、ユン・ツボタジがメインのファンク・ユニット、ユニット4を中心に、あの非常階段、シュヴァルツ、ジャンク・ジャングル・ジャンル、イデオット・オクロック、やけばちのマリア、ボアダムズ、東京から、ニウバイル、N.I.L.A.の計12バンドである。京都シーンにおいて中核を形成しうるパワーを持っているアーティストが存在している事は実証された。問題は、これらの存在を見る側にとっての価値にどのように変えて行くかだろう。しかし、

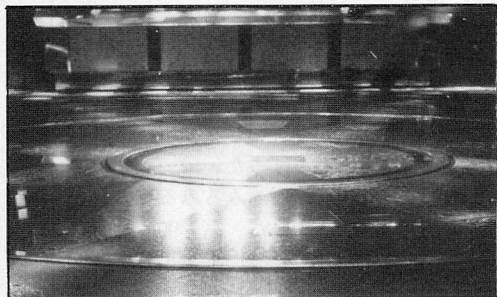
新たなシーンが徐々にだが確実に形成され始めているのを感じ取る事ができる。この秋には「京都ナイト」の第3弾が何らかの形で行われるという。その時までには彼等がどれだけのパワー・アップを見せてくれているかが今から楽しみである。また、その動きをどうフォローしていくかは我々の責任としてしっかり頭にたたき込んでおきたい。



## 読者は投げ返した。

### ■ クレーム処理班はこう考える ■

下京区の木下さんから、一枚の葉書が送られて来た。何やらわけのわからん文章の中に、ようやく質問を見つけることができた。彼女いわく、最近右を見ても左を見てもエイズという文字が多すぎるというわけだ。でも、そこで僕はまた投げ返す。エイズは、まだまだ死と隣り合わせ、心当りがなくてもやっぱり不安。少しでも知識を増し、今後に備えるべきなのだ。まあ君みたいな子は、全然全く皆目さっぱり心配いらずで、渦巻くエイズ情報は、平屋の非常階段のように必要ないのかも知れないが、まっ我慢してくれたまえ。



## 知っ得情報 [パーティー編]

### レンタルをうまく使おう。

今まで、パーティーなんて、上流家庭の人達が使う言葉であって、ラッキースタンプを集めてコーヒーマーカーと交換してもらった僕には全く無縁のものだと思っていたが、どうやら、世の中変わったようだ。女子大生達はマハラジャでサークルのパーティー、おじさんらは昔を懐しんでケントスでダンスパーティーと、一般人にもパーティーという言葉の使用権利が与えられたわけだ。で、パーティーへ行くことになるわけなんだが、会費は何とか用意できても、着る服が無い。頑張ってお昼をカップラーメンにしてようやく服を買っても本当の一張羅。月2回のペースには到底ついていけない。そこで近頃、目立って

きたレンタル業界で身をかためたらどうか。噂によるとレンタルブティックは、入会すると、8,000円位で服を貸してくれるのだそう。ちゃんと、クリーニングに出されてキチッとしてるし、普通のブティックから、2~3日試着させてもらっているようなものなんだ。おまけに、パーティーの内容によって、服を選べるわけだから、お洒落心は満開になる。女の子も、もちろん臨機応変に選ばばいい。このレンタルブティックは、なかなかのもんだと思う。人に言わなきやレンタルなんてわからないし、きっと女の子達は、「なんてお洒落な男の子だろう。」って思ってくれるに違いないからだ。まあ一度位、試してみてもいいんじゃないか。

ほんとに便利な世の中になったもんだ。パーティーバッグやアクセサリーも、よんもくや、でレンタルしてくれるのだそう。これであとはパートナーだけだ。あ、コンパニオンがいるか!?

誰もが一度は空を飛んでみたいと思ったことがあるのではないだろうか。私は、時々、無性に空を飛びたいと思うことがある。

そんな一見かないそうもない夢をいとも簡単に実現できたのが、今回のパラセール体験だ。

さる4月25日、私は、ある取材に同行することになった。初めて取材というものに立ち合った私は、好奇心と、そしてまた緊張とで少々興奮気味だった。そんな私を見て、某編集長が言ったのだ。「空、飛んでみーひんか。」と、私は、あまりの突然のことに、はっきり言ってビックリした。しかし、おもしろそうではないか。思わず「飛んでみたいですねえ」と言ってしまった。もう取り返しはつかない。まあ死ぬことはないだろう。やってやろうじゃないの。もう心は空だった。

ウェットスーツを着せられた私の体は、前は、ボートからつながれたロープが、後ろはパラシュートがつけられて、なんだか少し古いが、ジュリーの「TOKIO」をしているようだった。

準備が整ったところで、プロの方から「ボートが動いても、できるだけ飛ばされないように、足に力を入れてふんばって下さい。」と指示を受けた。そして、いきなりボートは動いた。私は必死にふんばった……がもう限界だ。体が地上から離れ、みるみるうちに私は上空に投げ出されていた。高さ90mはある（縄の長さが100mなので。）上空にロケットのように、ほとんど垂直に打ち上げられたのだ。気がつくと、そこは空の上だった、というぐらい急激に。私としては、もっと緩やかに徐々に上がるものと思っていたので『あの一気さ』には、ただただビックリ。もう半端じゃないのだ。お酒の席を盛り上げる時によくやる、あの一気コールの軟弱さとはケタ違いの『一气』だ。スリルに関して言えば、ジェットコースターどころじゃない。スケールが違うのだ。（遊園地に飢きたらない人は是非このパラセールをお薦めします。）感覚的には、日本昔話によく出てくるような、人間の数倍もある大きな怪物に、天にほうり投げられたような感じとでもいおうか。とりあえず、私にとってそれは人間界を離れていた。

上空を遊覧（本当はここがメインになると思っていたのだが）している時は、前の瞬間があまりにもすごかったので、今一つ感激度は薄かった。飛行機に乗っているようで、動いている感じがしなかったのが、あまりおもしろくなかった原因かもしれない。しかし、いったん大気に身を任せると、それはそれで気持ちよかった。緊張が柔らぎ、顔が思わずほころんだのも、この時だったなあ。

